



もいおかYMCA ニュース

発行日 2000 6. 05



響く, 歓声!!

第8回サッカーフェスティバル

6月4日(日)サッカーフェスティバルが仁王小学校グラウンドで開催されました。当日は、62名の子供たちに、24名のボランティアリーダー、そして、お父さん、お母さんが集まり、時折、降る、激しい雨の中、熱戦が繰り広げられました。

この日のメインイベントは、午後から行われた、YMCA選抜チーム対お父さんチームとの試合です。毎回、熱戦を繰り広げるこのカード。結果は、3対1でお父さんチームの勝利でしたが、「いやー、今回は体力で勝てたけど、チームプレイ、個人の技術では、完全に子供たちに負けてました。こちらも本気をださないといい試合ができませんからね。」菅野 航くんのお父さんの一言が熱戦の様子を物語っていました。



こちらは、幼児チームとお父さんチームの試合

ミニバザー開催される。

サッカーフェスティバルの会場で、ベストキッズ(YMCA選抜チーム)のお母さん達が、中心となり、ミニバザーが開催されました。Tシャツ、スキーウエア、スパイク、稲に、パセリなど、様々な物品が集まり、賑わいました。益金は、19870円となり、ベストキッズの備品(旗を検討中)を購入する予定です。

9月のミニサッカー大会、でも開催する予定だそうです。皆さんお楽しみに。



リーダーたちは赤のおそろいのジャージで登場。

ラポール

相手と向き合って心を合わせていくこと
(仏語:親和・共感的関係の意)

ヘレン・ケラーとの出会い

昭和20年6月19日の夜、福岡市は大空襲を受けた。軍隊に接收されていた福岡女学院の講堂も教室のほとんども、焼け落ちてしまった。三々集まってきた先生方と生徒たちは、焼け跡の空き地で礼拝した後、焼けた校舎の後片付けを来る日も来る日も行った。校舎や家屋もろとも聖書も賛美歌も焼けてしまったため、誰もっていない。どこからか見つけ出された聖書と賛美歌を用いて礼拝は行われた。当時の本田正一宗教主事はコリント信徒への第一の手紙の13章を毎朝読んでくださった。同じ個所であるため皆そらんじた。小学校を出たばかりの中学1年生の夏、青空の下で行われた礼拝で毎日出合った聖句である。家を焼け出され、学校を焼かれ、着る者も持ち物もほとんどなくなってしまったという状況の中で、「愛はいらだたず、恨みを抱かない。すべてを信じ、希望をもち、すべてに耐える。」と教えられた。福岡女学院の中学・高校6年間、われわれはこの精神の中で、はぐくみ育てられた。

昭和23年に2度目の来日をされたヘレン・ケラー女子が、再び福岡女学院を訪問して下さった。仮校舎の講堂で聞いた女子の「私は目が見えないので皆さんの顔も野に咲く美しい花もみることができません。耳も聞こえないので、小鳥のさえずりや小川のせせらぎ、賛美歌の声をきくことはできません。……障害をもって生きることはひじょうに不便ですが、決して不幸ではありません。心を静かにしていると、神様の声を聞くことができますし、神様によって生かされている喜びを感じ、感謝です…」という言葉をおぼろげに覚えている。

現代の子供たちに、私たちが経験したような出会いをさせようとしても無理かもしれない。しかし、現代は現代なりに、感動し、感謝し、いろいろな状況に耐え抜いていくのに必要な出会いがあるのではなからうか。あってほしいと、と私は願う。

(福岡女学院大学人間関係学部部長
篠原しのぶ)